

沖縄、愛知県などを中心に、はしかが広がっている。国立感染症研究所などによると、国内の今年の患者数は150人を超え、県内でいつ流行してもおかしくない状況だ。特に妊娠中の女性は、かかると重症化したり流産したりする可能

性が高まるとされ、日本産婦人科医会は今年、流行地を避けるなど注意を呼び掛けた。はしかの特徴をはじめ、妊娠中や希望している女性、周囲の人に必要な対策について、川崎医科大産婦人科の下屋浩一郎教授に聞いた。(水嶋佑香)

## はしか感染拡大 川崎医科大・下屋教授に聞く



# 妊婦は流行地避けて

### ■抗体ない世代

1人が平均12〜18人にうつすといわれるほど感染力が強く、通常のマスクや手洗いでは防ぎにくい。10〜12日程度の潜伏期間を経て高熱や発疹が出る。2回のワクチン接

種で予防できるが、国内では2005年まで定期接種が1回だったため、20代後半以上の多くは抗体が不十分。一方で40代以上の大半は過去の流行期に罹患したこと抗体を持っている。平均的な出産年齢に当たる30歳前後では、ほとんどの人に抗体がないとみられる。すといった対症療法しかできない。

### ■死亡率6倍

妊娠中にかかる

それ以外の人と比べて肺炎になる確率が2〜3倍、死亡率は6倍に

### ■水痘も重症化

母子手帳などの記録からワクチン接種が1回だと分かったり、抗体があるか不安だった

### ■電話で指示

かかわらず妊娠希望者はいずれの抗体も有無を確認し、不十分な場合はワクチンを接種してほしい。

高まる。さらに3〜4割が流産・早産するといわれる。妊娠中はワクチン接種ができないため、抗体がない場合は流行地に行かないこと。人混みも極力避けたい。妊娠中は水痘も重症化しやすく、風疹も重症化すると生まれた子が難聴や心疾患になる懸念がある。流行に

## 妊娠希望者 ワクチン接種を

妊婦への感染源とならないようパートナーもワクチンの接種回数や抗体を確認しておく方が安心だろう。特に海外や国内の流行地へ出張に行く機会がある場合は要注意。もし妻らが、はしかに感染している可能性がある場合、すぐに病院に連れて行かないでほしい。他の妊婦らに感染を広げてしまうため、病院に電話をして指示を受けてほしい。